

人文社会教育科学系<人文>准教授

高橋 秀樹

① SOTL

3月10日の各セッションに参加した。

第1トラック第5セッション「問題解決学習と能力評価」

PBL学習の運営の難しさと、成績評価の方法の開発の難しさが印象に残った。

第2トラック第4セッション「大学の授業でのEメールの利用」

授業内容に関する教員と学生のコミュニケーションのためにEメールを多用すると、学生からどんな反応が生じるか、アンケートを用いて実証しようとした試み。結論としては、データ上は対面式コミュニケーションでもメールコミュニケーションでも決定的差異はないことが示された。フロアからの質問で、1クラス数百人が普通である大規模大学と少人数教育を特徴とする大学では、自ずとメールコミュニケーションの意味が異なり、教育効果も分けて考えるべきではないかというものがあり、同感であった。

第3トラック第3セッション「多言語・多文化の授業」

外国人が多い授業をどのように運営するか、という問題を扱った報告。

報告の対象となっていた大学は、26%が外国人で、80カ国から集まっているものだった。新潟大学の状況とは比較できるものではなかったが、実際の授業で直面する諸問題は、類似したものが意外と多かった。

第4トラック第5セッション「クリッカーの活用」

大学の授業でクリッカーを導入した事例の報告と、その効果についての説明。授業時間のすべてが、知識を一方向的に受け取る時間になっていると、どうしても学生の受講姿勢がだらけてしまうが、クリッカーによって、学生からの反応を求める機会を適切に設けると、受講姿勢が向上し、学習効率が上がる、という内容。発表の主旨は大いに同感したが、現実の導入にあ

たっては、教員と学生の双方が機材に慣れるまでやや手間取るかもしれない(PCのソフト設定、PPTが前提となる授業、等)。なお、授業開始20分くらいで学生がだらけてしまうという実例として、下位大学の例ではなく、ハーバード大学の実際の授業の例が示されたのは、印象的だった。

第5トラック第2セッション「授業での携帯電話の活用」

化学の授業で携帯電話を利用した実施例。クリッカーと同趣旨。

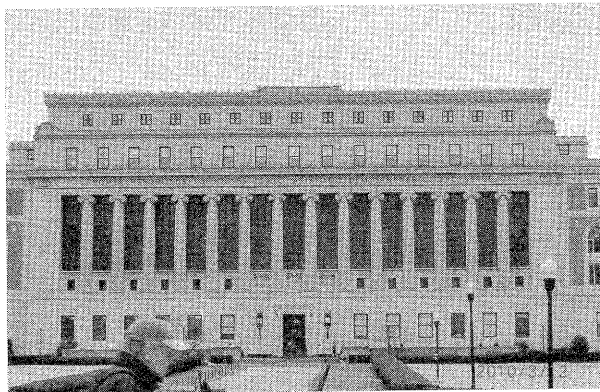


SOTL コモンズ会議 3月12日
セッション「クリッカー」

② ニューヨーク

コロンビア大学では、本部棟と書籍部・学生食堂を視察した。本部棟では学外からの訪問者のためのパンフレットが充実しており、大学ツアーの斡旋などもよく組織されていた。本部棟の建物自体が鑑賞に値するものであったが、その内部においても、研究教育活動の象徴となる文化財の展示や、大学への支援者のリストの掲示などが充実していた。

ニューヨーク市立大学では、広大な敷地が良く整備されており、かつ、保安体制が充実していたことが印象に残った。



コロンビア大学 (1754年～) バトラー図書館



ニューヨーク市立大学 (1847年～)

③ インディアナ大学

(訪問場所とインタビュー相手は参加者全員が共有しているので省略し、感想だけ記します。)

第一に敷地の広さと設備の充実が印象的だった。

学外からの訪問者のための宿舎について、新潟大学は質量ともに充実させる必要があると感じた。

大学敷地内の博物館や美術館などが充実している。単に教育研究関係の物品を並べているだけでなく、本格的な美術館・博物館としての体裁を有しており、かつ、一般の来館者が楽しむことができるような展示内

容となっている。

教育内容の調査については、数値的データの蓄積が印象的だった。アンケートを戦略的に用い、統計的処理を綿密に行うことは、新潟大学で一層の努力が必要であると感じた。特に教育内容の改善について個々のトピックごとに必要性を学内の教職員に訴える際に有効ではないかと感じた。ただし、内容が綿密なものであるほど、網羅的で統一的なアンケートの実施は困難であること、また、データの解釈について統一の見解をまとめることが難しいことも、併せて感じさせられた。

視察報告 4

The Intensive English Program at Indiana University Bloomington インディアナ大学ブルーミントン校英語集中プログラム

グレゴリー・ハドリー

Gregory Hadley

Part-time lecturer, the Faculty of Economics, Niigata University
(Professor, Niigata University of International and Information Studies)

In March 2010, I travelled to America with a Niigata University task group studying Higher Educational Institutional (HEI) reforms and the role that the Scholarship of Teaching and Learning (SOTL) Movement has played in the process of these changes. During this trip, I met with Dr. Heidi Vellenga, the assistant director of the Intensive English Program (IEP) at Indiana University in Bloomington, Indiana. Over the past six years, I have surveyed a number of tertiary intensive English programs in locations throughout the United States and UK, but her program was by far the larg-

est I have seen, with over thirty teachers and nearly three hundred international students. The following are some of the points that emerged during our 45-minute conversation, together with my commentary based upon my earlier research and observations.

Indiana University does not require the Test of English as a Foreign Language (TOEFL) as a prerequisite for international student admission, but instead uses a State English examination called the Indiana English Proficiency Exam.